
世界で一番醜い娘と世界で一番美しい若者

楠瑞稀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界で一番醜い娘と世界で一番美しい若者

【Nコード】

N6457C

【作者名】

楠瑞稀

【あらすじ】

昔々ある所にとんでもなく醜い娘がいました。ある日娘は、世界一醜い娘と世界一美しい若者との子供が見たいと思った王様のせいでお城に連れて行かれてしまい……？「めでたしめでたし」で終わる、コミカルでお約束でロマンティックな異世界迷作劇場。

第1話（前書き）

これは作者のHP『飛空図書館』に掲載されている作品と同一のも
のです。

第1話

やあやあ、お兄さん暇そうな顔をしているね。旅人さんかい。よかつたらおいらの話聞いていかないか。

ん、どうして子供がこんな時間に出歩いているのかだつて？ そりゃあ小遣い稼ぎの為に決まっているだろうよ。おいらはこれでもこの国一番の語り手だから、この時間がいい稼ぎ時なんだ。……いやまあ確かに、国一番と認められるのはまだまだこれからなんだけどさ。

そんなことより話を聞いて行きなよ。この国の人間なら誰もが知ってるおとぎ話。陳腐でお約束なストーリーとご都合主義の展開が続くハッピーエンドの物語だ。

ん、怪訝な顔してんな。なるほどそんなありきたりのお話がどうしてこの国ではこんなにな有名なのか気になっっているんだろう。

それはな、この話がこの国で実際にあったことからさ。もっともそれもずっと昔、おいらが生まれるよりも前のことではあるけどな。

どうだい。聞きたくなってきただろう。そしたら御代はこの帽子の中に。しっかりしてんなって？ へへ、毎度あり。

それじゃあこの国でもっとも有名なおとぎ話『世界で一番醜い娘と世界で一番美しい若者』のはじまりはじまりだ。

この酒場を出てすぐ右手に、教会の高い尖塔のてっぺんがのぞいていたのを覚えているかい。その教会こそがこの話の最初の舞台さ。

昔々のお話です。この国の教会に一人の醜い娘がおりました。

娘は赤ん坊の頃に捨てられ教会の孤児院で育ちましたが、それは

それは並外れた、とんでもなく醜い顔をしておりました。

年は十八の娘盛りではありますが、一目見れば悲鳴をあげ吐き気を催すほどのおぞましき。二目と見られぬ顔とはまさにこの事です。

あまりにも醜いとの評判を聞きつけて、話の種にと見に来る物好きも少なくありませんでしたが、大の大人ですら腰を抜かす始末。気が弱い人間にいたっては三日三晩夢に出てきてうなされるほどです。

ちなみに教会に届けられた報告によると、もつとも長くうなされていた日数は二週間弱。たぶんもつとうなされた人間もいたのだでしょうが、そこまで長く夢に出たとなると臆病者とかかわれるか、娘に惚れてしまったのだと勘違いされる心配があるので口外にできなかつたのでしよう。

しかしそんな醜い娘ではありませんが、実際のところ本人は大層けろりとしたものでした。

何しろ否が応にでもこの顔とは、一生付き合っていかなければならないのは分かりきったことです。それに自分の顔なんて鏡さえ持つてなければ滅多に見る機会もないわけですから、普段は意識することはありません。

だったらいちいち気にしていることもない、とすっかりさっぱり開き直っていたのでしよう。

娘の顔はどうしようもなく醜いものでしたが、それに反してその心は例えようもなく美しく——と、いう事ありませんでした。荒んで僻んで醜かったという訳でもありませんので、言ってみればいたって普通の性格という事でしよう。

例えばある日教会の庭を掃除していた娘は、蜘蛛の巣に引っかかった大きな黒揚羽を見つけ逃がしてあげました。ひらひらと青空の遠くへ飛んでいく揚羽蝶を見送って娘は、

『蝶々さんは優しいわね。だってわたしの顔を見ても醜いなどとは言わないですもの』

とか考えることも一切ありません。

とりあえず目に付いたから何となく逃がただけで、単なる気まぐれ、どちらかというと蜘蛛より蝶の方が好きだし？　とかいうぐらゐの考えでの行動です。

万事が万事そんな調子ですから、当然言葉も喋れない節足動物に語りかけるようなりリカルなセンチメンタリズムなど欠片も持ち合わせておりません。

そんな訳で性格は悪くないのですが、どうにも情緒に欠けた淡泊な娘ではありました。

人に迷惑はかけまいという気遣いもあり、娘は顔を合わせた人を驚かさないように普段は仮面を被っていました。が、それでも世界で一番醜い『異形の娘』の評判は国中に広く伝わっていきました。

さて、その評判はとうとう国を治める王様のところにも届きました。この王様、仕事っぷりはそう悪くないのですが如何せん趣味が悪すぎました。やれ処刑だ、やれ拷問だというような血生臭いことにはまだ手を出していないものの、それでも子供が蝶の羽根をむしるように無邪気に残酷なことをするものだから困ったものです。

王様は娘の評判を聞きつけて思いました。

『世界で一番醜い娘が世界で一番美しい若者の子供を産んだら、果たしてその子供はどのような顔をしているのだろう』

そんな下世話な興味を押さえ切れなくなった王様は、さっそく娘を連れてくるよう役人に命じました。

そのことを知った国民は総じて「悪趣味」と思いましたが、それでも口にすることはありませんでした。なにしろ腐つても王様ですから。

図らずも当事者となってしまった娘もやっぱり「悪趣味だ」と顔をしかめました。が、それでも王様の出頭命令にはしぶしぶと従いました。

これが貴族の子どもだったら話は別でしょうが、娘は教会に捨てられていた単なる孤児。自分の身の程はしっかり弁えておりました。

それに娘は思います。

たぶん自分が躍起にならなくても、この顔を見たら相手の方が死に物狂いで拒否するだろう。だったらそれまで適当に王様の道楽に付き合つてとつと教会に帰つてこよう。

——国から報償金もいくらか貰えるだろうし。

娘はそれくらいにはしたたかでありました。

さて、そうして娘はついにお城に連れて行かれてしまいました。

金銀に飾られた馬車は、しゃなりしゃなりとかしこばって真つ白なお城に入っていきます。こんな機会、孤児院育ちの自分にはたぶんもうないだろうからとなかば観光気分でいた娘ですが、さすがに王様の前に引き出されたときは緊張しました。

「これが世界で一番醜い娘でございます」

娘を連れてきたお役人は王様に向かって朗々と口上を述べます。

しかし王様はそんなことよりも早く娘の顔が見たくて仕方がありませんでした。

「これ娘、早く仮面をはずしなさい」

そう急かされ娘はやれやれと仮面をはずし、王座の間に世にも醜い素顔を曝しました。

娘の顔があらわになると、なんてことでしょう。その場にいた多くの役人・貴人たちは次々に悲鳴を上げてばたと卒倒していきしました。顔を見せたそれだけで周囲は阿鼻叫喚の地獄絵図です。

最も見たがつていた王様にいたつても、さすがに倒れはしませんでした。思わず青ざめ「ううつ」と呻き声を上げてしまいました。

「なるほど。確かになんと醜くおぞましい顔なのだ」

王様はまるで汚い物でも見たかのように顔をしかめると、「これ娘、二度と余にその恐ろしい顔を見せるでないぞ」と言い含めます。てめえが先に見たいと言ってきたんだろうがこのトンチキ、と娘は内心すごく思いましたが、それでも澄ました声で「承知いたしました」と答えました。

気が済んだ王様は娘を引き上げさせます。しずしずと王様の前を去る娘の耳に面白がるような声が届きました。

「この醜い娘が果たしてどのような顔の子を産むのか、楽しみだな」

「……悪趣味」

思わず娘は吐き捨てましたが、幸運なことにそれが王様の耳に入ることはありませんでした。

第2話

そうして王様と会った娘は、とうとう世界で一番美しい若者とも引き合わされることになりました。

娘はてつきり世界一美しい若者をこれから探し出すのかと思って余裕をこいていたのですが、残念なことに悪趣味な王様のもとにはとくに該当する人物が居りました。たぶん世界で一番美しい若者がすでに手元にいたからこそ、こんな悪趣味なことを思い付いたのでしょう。

娘はお役人に言われ、お城の一角にある高い高い塔を上っていきます。息切れをしながらなんでこんな面倒臭い場所にいるのかと首を傾げましたが、ふいにその理由に思いあたり思わず顔をしかめました。

「悪趣味」と呟こうともしましたが、残念ながら弾む息に邪魔されて言葉にはなりませんでした。

そしてとうとう目的の部屋に辿り着いた娘は、まず扉のまん前でおもむろに仮面をはずし始めました。相手には申し訳ないけれど、とりあえずとつとこの顔を見せて自らに突きつけられた現状を理解して貰おうと思ったからです。

「ごめんくださいましっ」

仮面をはずした娘は道場破りもかくやと言う勢いで扉を開け、そして目をつぶりました。聞きなれた悲鳴やうめき声、罵声を覚悟したからです。

しかし娘の耳に届いたのは「いらっしやい」という穏やかな返事でした。娘は訝しく思いながら恐るおそる目を開けて、そして叫びました。

「しまった、当てが外れた！」

若者の傍には白い杖。はじめから硬く閉じらた瞳は、娘の姿どころか一切の光を映すことはありません。

つまり若者は盲目だったのです。

「何の当てが外れたんだい」

若者はテーブルに肘をつきながらくすくすと可笑しそうに笑って娘にも席を勧めました。親しみのこもった相手の態度に落ち着かない思いをしながらも、若者に対しては何の恨みもないので娘は素直に椅子に座ります。

これは困った。

娘はげんなりと思いました。なにせ相手に顔を見て嫌がってもらえないとなると、王様に諦めてもらうために自分が奮闘しなくてはならなくなるのですから。

悩める娘にしかし若者はににことのんきに話しかけます。

「こんにちは。いいお天気ですね」

おずおずと娘はうなずきました。

「そうですね。……というか何であなた、そんなに楽しそうなんですか」

娘は訝しげに眉間に皺を寄せます。これほどまでに理不尽な状況に追いやられていると言うのに、どうして彼はこれほど能天気にしていられるのだろうか。

不思議がるその顔は飛んでいる鳥もばたと落ちるほど醜くおぞましいものでしたが、目の見えない若者にとってはなんら気にすることでもありませんでした。

「ええ。私の顔を見て絶句されたり、悲鳴をあげられなかったことが嬉しくって」

若者はそう言ってまたににこと笑いました。
なるほど。

娘は納得いたしました。若者は、確かに世界で一番美しい若者でした。娘とは違ってとても綺麗な、目を疑うような美しさを持っています。

しかしそれはあまりに美しすぎて逆に人に恐ろしさを感じさせるような美貌だったのです。これでは確かに、きつと見た人が思わず

悲鳴を上げて腰を抜かしてしまうに違いありません。

綺麗もここまで来ると異形となるのだな、と娘は初めて知りました。もつとも異形に関しては人をとにかく言えた立場では無いので娘自身は特に何とも感じませんでした。

「なんというか、お互い顔で苦労しますね」

「そうですね」

若者はにっこりとうなずきました。娘はちょっと嬉しくなります。なんだか生まれて初めて自分の同類に巡り会えた気分になれたからです。

若者は娘にお茶を入れながら、自分のことを話しました。

若者はもともと旅の楽士として、あちこちの国を渡り歩いておりました。この国もそれまでと同じように、気が済むまで見て回った後に出て行こう思ったのですが、世界一美しい楽士の噂を聞きつけた王様に城に招かれ、面白がられてここに引き留められたのだと言います。

やっぱり、と娘は思います。娘の想像通り、若者はこの塔に囚われていたのです。

「監禁ですか」 娘は尋ねます。

「監禁ですね」 若者は答えました。

「悪趣味ですな」 娘は言います。

「悪趣味でしょう」 若者はうなずきました。

二人は顔を見合わせて、やれやれとため息をつきました。本当に悪趣味な王様もいたものです。ついでになんとも噂好き。

せっかくなので入れてもらったお茶を飲みながら、娘も自分のことを話すことにしました。教会に捨てられ積極的に人に迷惑をかけるでもなく大人しく暮らしていたのに、ある日噂を聞きつけた王様に面白がられて、世界で一番美しい若者の子供を生めと問答無用で連れて来られたと言う話です。

「強制連行ですか」 若者が尋ねます。

「強制連行ですね」 娘は答えました。

「悪趣味ですね」 若者は言います。

「悪趣味ですよ」 娘はうなずきました。

二人はそれぞれ顔を見合わせて、またため息をつきました。そして互いの境遇に深く同情をしたのでした。

こうしてすっかり意気投合しあう二人でしたが、しかし娘は若者にはばれないようにこつそりと眉間に皺を寄せておりました。

それはけして若者が気に入らないからというわけではありません。むしろその逆。娘が気に食わないのこのシチュエーションでした。

なにしろ若者はただでさえこんな不幸な目にあわされているのです。

娘が好んで良く聞くおとぎ話なんかではこういう場合、美しいお姫様や可愛い妖精が出てきて話を素敵に盛り上げますのに、若者にあてがわれたのは世界で一番醜い自分。これでは物語りは盛り下がる一方です。

別に娘は演出家でもなければ編集者でもないのだからそんなこと気にする必要はまったくないはずですが、妙なところでこだわる娘です。たぶんよっぽどのおとぎ話マニアなのでしょう。

もちろんだからと言つて的外れな自己嫌悪に陥ることはありません。しかしそれでも娘は、心の片隅で場違いな自分の存在にがっかりしました。

そんな胸を痛める娘の心内を知ってか知らずか、ふいに若者が娘に言いました。

「ところで先ほどから思っていたのですが、あなたはとても素晴らしい声をしていますね」

娘は思わず目を見開き、そしてほんのりと顔を赤くしました。

なにしろ普段人と顔を合わせる時は被った仮面の所為でぐもつてしまふのですが、娘にとっては自分の声こそが一等好きな部分でした。

一番の幸せを感じるのには、自分の子守唄で泣き喚く子供がすうつと眠りにつくとき。その速さと効果は孤児院の中でもダントツでし

た。

もちろんうつかり顔を見せると逆にシヨックのあまりにヒキツケを起こされてしまうこともしばしばでしたが。

「よかつたら私が歌を教えてあげましょうか」

気前良い若者の申し出に娘はすごく驚きました。そして慌てて首を振ります。

自分たちの状況を考えてそんな悠長なことを言っている場合では無いという思いが半分、玄人の楽士に歌を教わるなんて恐れ多いと言ふ思いが半分と言ったところでしよう。

「遠慮は要りませんよ」

娘のジェスチャーが見えたわけでもないだろうに、若者は優しくそしてどこか茶目つ氣たつぷりに言います。

「なにぶん時間だけは充分にあるでしょうからね。たぶん国王はあなたが身籠るまでは幾度だって私の元にあなたを遣わすでしょう。この塔にいる限りは何をしているかなんて聞こえるはずもないし、聞き耳を立てるような下世話な真似もされないだろうから安心ですよ」

神々しいくらい美しい顔をして述べられるあからさまな物言いに、美醜はともかく年頃の娘は顔を真っ赤にして俯きました。そして同時に思います。どれだけ王様が望んでも、所詮は子供なんて天からの授かりものです。ようは王様が飽きるまで適当に誤魔化していればいいだけの話。

つまりこれは若者からの、それまでの時間潰しの提案なのです。

今度は娘もはつきりうなずきました。

「分かりました。どうぞよろしく願います。師匠」

「はい。こちらこそ。——遠慮なく仕込んで差し上げますよ」

そして二人はひそやかに笑い合い、固い握手を交わしたのでした。

第3話

そうして王様の期待も空しく、娘の歌はどんどんと上達していき
ました。

宣言どおり若者の指導はたいへんきびしいものでしたが、それで
も娘にとっては楽しくて仕方ありませんでした。

なにしろ娘が素顔で接することができるのは、世界中探してもこ
の若者ひとりだけ。仮面をつけていた時でさえこんなにも長い間誰
かと顔を突き合わせていたことなど今まで一度もなかったからです。

異形の娘は仮面を被っていてもなお、人から疎まれ忌避される存
在でありました。

指導の合間に若者はよく色々な話をしてくれました。娘にとって
は想像もつかない異国の風景やそこで語り継がれる素敵な恋の物語
などです。

他にも極彩色に彩られる南の海の冒険譚や恐ろしくも魅力的な砂
漠の王国のお話、あるいは可愛らしいお姫様の数奇な人生の物語に、
娘は年頃の女の子らしくドキドキと胸を高鳴らせました。つつか淡
白な性格に娘には珍しく大はしゃぎでした。

また時に若者は娘を外に連れ出しました。二人のムードを高める
ためだ、とか何とか言って口先一つで王様を丸め込む若者のしたた
かさに娘は呆れたり舌を巻いたりしましたが、それでもちよつと遠
出をして綺麗な湖を見に行ったり空気の美味しい森でお弁当を食べ
たりするのは今まで感じたことがなくらいに楽しいことでした。

世界一醜い娘と世界一美しい若者が仲睦まじく連れ立って歩く姿
に周囲の人は慄き、そのおぞましさに顔を歪めましたが、そんなこ
と二人にとっては大して気になることではありませんでした。

しかしそうこうするうちに娘は、自分の中に困った感情が生まれ
つつあることに気がつきました。

世界一醜い娘は世界一美しい若者に恋してしまったのです。

娘は悩みます。自分の醜さは百も承知ですから、自分とあの美しい若者がとうてい釣合わない事だって分かっています。それに結果的に王様の望むとおりになることが非常に癪だという苦悩もあります。

そのようなことにうだうだと頭を痛めている娘に、しかしある日とんでもない転機が訪れました。

それはいつものように、表向きは王様に命じられてしぶしぶ仕方なくと言う態で娘が若者の元に向かっている時のことです。

ふと、娘の目の前を一匹の黒い揚羽蝶がひらひらと飛んでまいりました。もっともそんなこと、別にたいしたことでもありませんので娘がそのままスルーしようとしたところ、背後からいきなり声が掛かります。

「おいおい。無視するなって」

怪訝に思っただけで振り返ると、飛んでいた蝶はどこにも見えずその代わりに一匹の糞餓鬼——もとい、一人の子供が立っていました。

「なあに、あなた。わたしの顔を見に来たの？ やめときなさい。夜眠れなくなるわよ」

娘はいささかうんざりした面持ちで、投げやりにこたえます。王様が娘を呼び寄せてから評判はますます高まり、若いも若いも世界一醜い顔を見ようと娘のところに行って来ておりました。

子供は一瞬きょとんとした表情を浮かべ、それからすぐに慚然とした顔付きで首を振ります。

「違うよ、そうじゃないって」

子供は恐れもせず娘の前にやってきて、びしりと指を突きつけました。

「俺は悪魔だ。以前あんたに助けてもらった借りを返すためやってきた」

「はあ？」

娘はものすごく怪訝そうな顔をしました。仮面さえなければ例え

悪魔であつても思わずおしっこをちびつてしまひそうになるくらい
禍々しい、いたく恐ろしげな顔が見えたはずです。その点この悪魔
は大変ついていたと言つてもいいでしょう。

娘は首を傾げます。

「別に悪魔なんて助けた覚えはないわよ」

「いや、あるはずだ。前に蜘蛛の巣にかかっている蝶を助けたこと
を覚えてるだろう」

そうなのです。以前娘が気まぐれに蜘蛛の巣から逃がした黒揚羽
は、何を隠そうこの悪魔だったのです。

しかし――、

「まったくもつて覚えていないわね」

娘はぱつぱりと一言のもと切つて捨てました。これにはさすがの
悪魔も思わずひくりと顔を引きつらせずにはおれません。

ただ娘にしたつて別にとぼけている訳ではなく、正直そんなど
うでもいいことはいちいち覚えていたりはいらないだけです。

おかげで悪魔はかなり情けなく歯痒い思いを味わうことになつて
しまつたわけですが、それでも何とか気を取り直すとあらためて娘
に言いました。

「とりあえずつ、さつき言つた通り助けられた礼にあんたに良い物
をやりに来た」

「結構です。悪魔のくれる物なんて胡散臭くて受け取れないわ」

娘はきつぱりさつぱり断つて潔く身を翻しました。悪魔は驚き、
慌ててその後を追いかけます。

「いや、待て待て待て。けしてあんたの損になる話じゃないから」

「人を陥れるのが仕事である悪魔の甘言に乗つて身を滅ぼすのはご
めんですからわたしとは縁がなかったと思つて諦めてください」

「息継ぎも無しに身も蓋もないことを言わないでくれっ！　こうい
う時はポーズだけでも興味ある振りをするもんだろつ。とりあえず
今回は仕事できたんじゃないから話だけでいいから聞いてくれよ」

今にも泣きつかんばかりの様子で袖を引かれ、娘はしぶしぶ足を

止めました。

「話だけよ」

悪魔はほっとした様子で話を始めました。これでそれが娘を騙すための演技だとしたら立派なものですが、悪魔はなりたての新米だったため残念ながら思いつきり素でした。

悪魔はこほんと咳ばらいをして、可愛らしいサイズの小瓶を差し出します。

「これは人間の欠点を治す事ができる魔法の薬だ。これを使ってその不細工な面でも治せ」

娘は胡散臭そうな顔でその小瓶を見つめ、一言いいました。

「どうしてあなたは蜘蛛の巣になんて引つかかっていたの？」

「躊躇なく人のトラウマ抉る奴だなっ！！」

悪魔は顔を真っ赤にして怒鳴りました。なぜなら新米悪魔はうっかりと蝶の姿から元に戻る呪文を度忘れして、娘に助けられた時は普通に絶体絶命の危機に陥っていたからです。

「悪かったな！！」

「別に悪くは無いけど……」

娘は首を傾げました。

「どうしてこんな物をくれるのよ」

「あんたに助けてもらってから、あんたのことをずっと見ていた。その結果、あんたみたいな真面目で心優しい人間が不遇な目にあってるのがなんとも不憫に思ってたんだ」

「して、その心は？」

娘は冷静につっこみます。

「天使も悪魔も人間に助けてもらったら、必ず恩返しをしなければならぬと因果律で決まっているんだよ。それに残念ながらおまえみたいな厄介な性格した人間を騙すには俺のスキルが足りないんだ。見栄張って悪うございましたっ！ だからやるもんやってとつとと帰らせて貰うぞ」

悪魔はすっかり投げやりな表情で吐き捨てました。たぶん定めら

れた決まりでもなければ、こんな質面倒臭いタイプの人間とは関わりあいになりたくもなかったのでしょうか。

ほらっ、と悪魔は小瓶を差し出します。普段ならこんな怪しげなものにはまったく興味を持たない娘でしたが、今日ばかりは何だか少し様子が違っておりました。娘は戸惑ったようにその小瓶を見つめています。

「この薬は、必ずわたしが飲まなきゃいけないの……？」

ぼつりと訊ねられた言葉に悪魔は娘が何に躊躇ためどっているのか気づき、にやりと笑って付け足します。

「もちろん、あんたの大事な奴の目を治す事だってできるさ」

確かにそれは性格だろうが身体だろうが、欠点と呼ばれる部分ならなんでも治すことができる魔法の薬なのです。

娘は珍しく深く考え込んでしまいました。この薬があれば自分の長年の悩み、というほど悩んじゃおりませんでした。それでも色々といやな思いをする一番の原因だった醜い顔とおさらばすることができます。けれど自分が世界一醜い娘でなくなれば、たぶん王様は娘から興味をなくし、二度とあの世界一美しい若者とも会うことはなくなるでしょう。

しかし若者の目を治すことにしたら。若者の目が見えるようになつたらどうなるでしょう。そんなこと決まっています。きっと若者は世界で一番醜い顔を見て、娘のことを嫌いになつてしまふに違いありません。

そんなことは無いと言い切れるほど娘は自分の顔に関して無知ではなく、根拠の無い自信を抱くこともできませんでした。

世界一醜い娘という称号は伊達でも酔狂でもないのです。

娘は悩みました。たぶんこれまで歩んできた人生での使った悩みを全部合わせたよりも悩んだことでしょう。そうして長い長い時間がたった後、とうとう娘は一つの決断を下しました。

「この薬、ありがたく貰っておくわ」

娘は悪魔から薬を受け取ります。腹が決まれば娘の行動は素早い

ものでした。

悪魔はその途方もない長考にうんざりし始めておりましたが、にやりと笑って「幸運を」と言います。

悪魔に言われるぐらい縁起の悪い台詞もなかったですが、それでも娘はその言葉に神妙にうなずいたのでした。

第4話

世界で一番醜い娘は悪魔と別れたその足で、世界で一番美しい若者のいる塔へ向かいました。

若者はいつもの時間になってもなかなか娘がやってこないことに心配していたので、ようやく娘が来たことにほっと息をつきました。「なんだか今日はえらく遅かったね。何かあったのかい」

「ええ、それについてはお茶を飲みながら話しますよ」

そう言っただけで娘は手早くお茶を用意し、若者の前に置きました。

目が見えない分人よりも気配に聡い若者は、娘がなんだか沈んでおり同時にいつになく緊張していることを訝しく思いながらも、入れてくれたお茶に口をつけました。

「それで、なにがあったのか教えてくるかい」

「実はここに来る途中で、わたしに助けて貰ったと言う悪魔に会いましたですね」

「ふむふむ」

若者はうなずきます。そんなとんでもない告白をすんなりと納得するあたりこの若者、やはり人並み外れた美しさを持っているだけあって平凡な人生は歩んでいないようです。

もっとも娘はそんなことには何も頓着せず、ずばりと核心を述べました。

「あらゆる欠点を治す魔法の薬というものを貰ってきたので、ぜひともあなたに飲んでもらいたいと思いました」

するとどうしたのでしょうか。若者はとっぜんお茶を吹き出してしまいました。むせる若者が落ち着くのを神妙に待ちながら娘は思います。

例え欠点が治る魔法の薬を飲んでこの醜い顔が人並みになったとしても、それを一番知って欲しい人に見てもらえないのでは何の意味もありません。ならばその薬は娘にとっては無用の長物です。

だったら例え悲鳴を上げられ唾棄される結果に終わろうとも、せめて愛しい若者の役に立てて貰いたい、——と娘はそんな風に考えたのでした。

ようするに恋をしたことで娘はほんの僅かでしたが、リリカルなセンチメンタリズムを身に着けるようになったのです。

若者は激しく咳き込みながらも、それでもなんとか呼吸を整えようとまだ若干掠れた声で娘に尋ねます。

「まさかこのお茶の中にその薬が入っているのかい!？」

「最初はそうしようと考えていたのですが」

娘は淡々と答えます。

「とりあえず本人がどうしたいのかを聞いてからの方がいいと思いましたので、薬はここに」

テーブルの上にこんつと音をたてて薬の瓶が置かれました。

例え恋に目が眩んでいたとしても、娘は悪魔から貰った怪しげな薬を問答無用で人に飲ませようとはしないくらいにはやっぱり常識人でした。

「——なるほど賢明な判断だね」

若者はにつこりとうなずきます。

そしてこつそり胸を撫ぜ下ろし、「ああ、焦った」と小声で呟きました。

「気持ちはいがたいけれど、私は今のままで何の問題もないと思っています。だからその薬は必要ないですよ」

「わかりました」

娘はあっさりとうなずき薬瓶を引っ込めます。

本人が必要ないと言っているものを無理に飲ませる理由はどこにも見当たりませんから。

「それでは悪魔から貰ったこの薬ですが、必要がなくなってしまうでしたね」

娘はどこかほつとした面持ちで薬を眺めそう言いました。覚悟していたとは言え、さすがに若者に悲鳴を上げられ怯えられることを

考えるのは辛く哀しかったのです。

そんな娘に優しく微笑みかけながら若者は言います。

「悪魔から貰った薬を使わなければならないほど、我々はどうしようもない状況にある訳では無いですからね」

「そうですね」

世界で一番醜い娘と目の見えない世界で一番美しい若者はそう言
って顔を見合わせると、どちらともなく笑ってしまいました。

例え傍からどう思われても自分さえ構わなければそれは不幸とは
呼ばないのです。娘は久しぶりにそのことを思い出しました。

「しかし勿体無いですね。こんなすごい効能を持った薬なのに」
薬瓶をまじまじと見ながら娘は改めてしみじみと呟きました。

別に自分にも若者にも必要ないのですからもう捨ててしまっても
問題はないのですが、孤児院育ちの哀しい性です。身についた貧乏
性の所為でどうしても勿体無いと思ってしまうのでした。

「何かに使えはしないでしょうか」

若者もそれに付き合っとううむと唸っていましたが、やがてぴん
と指を立ててくすくすと笑い出しました。

「ありますよ。とても素晴らしい使い道を思いつきました」

そう言っ若者は、世界一美しい相貌ににやりと不穏な笑みを浮
かべたのでした。

数週間が過ぎたころ、国にはある噂がささやかれておりました。

それは世界で一番醜い娘と世界で一番美しい若者が世にも不思議
な魔法の薬を持っているという噂です。

その噂は飛ぶ鳥よりも素早く国中に広まり、やがてそれは大人か
ら子どもまで知らぬ者など一人もいないという程になりました。そ
の広まり方、そして速度はあまりに完璧すぎていささか不自然なほ
どでしたが、そのことに気付く人間は一人もいませんでした。

そしてその噂は当然、噂好きで悪趣味な王様の耳にも届きました。

せつかく見つけた世界一醜い娘もなかなか身籠らず、単調な毎日にそろそろ飽き飽きし始めていた王様でしたので、嬉々として二人――世界一醜い娘と世界一美しい若者を呼び寄せました。

「おぬしら、聞けばなにやらないそう面白そうな薬を持っているらしいではないか」

謁見の間に着いて早々、王様はわくわくとした顔で二人にたずねました。

「魔法の薬と伝え聞いたが、もしやおぬしらはその薬を使ってそのような顔になったのか？ いやいや、さすがにおぬしは違うだろうな、娘よ。好きこのんでそんな醜い容貌になりたがる人間などいるはずもない」

相変わらずデリカシーの欠片もない王様の言動に娘はげんなりと眉を顰めておりましたが、ありがたいことに王様にばれることはありませんでした。まあ、この仮面もたまには役に立つと言うことです。

「陛下がおっしゃっておられるのはこれの事でございましょうか」

若者は薬瓶を楚々とした動作で王様の眼前に差し出します。王様は子どものように目をキラキラさせて叫びました。

「おおつ、それだそれだ！ それが噂の魔法の薬だな！」

今にも涎をたらして飛びつかんばかりの様子の子の王様を前に、世界で一番美しい若者は天使の様な笑みを浮かべて、つつつと後ろに下がります。つられて王様はぐつと身を前に乗り出しました。その様子に娘と若者はこっそりと目配せを交わします。

あからさまに興味津々の王様に向かって、若者はまるで歌うような声で言いました。

「陛下のご慧眼には恐れ入ります。確かに私はこの薬の効能にて世界一美しい顔を手に入れました。なぜならこれなりますは、我が心根の善良さに目を留めて天が遣わしました神秘の妙薬、飲めば己の望むものになれる魔法の薬なのでございます」

もちろんそれは口からでまかせに決まっております。しかし若者

はさらに面白おかしい逸話を並べ立て、王様の興味をガシガシ引いていきます。

その様子は楽士というよりかはいささか詐欺師じみている気もしないではありませんでしたが、まあ気のせいということにしておきましよう。そして当然こんな面白そうな物を前にして、この王様が我慢できるはずありませんでした。

「なるほど、この薬を飲めば余も三国一の賢王になれるという訳だな」

なんだかかなり話が大きくなってもありますが、そこらへんは若者のリップサービスの賜物と言ったところでしよう。

「小麦の袋を十袋やろう。だからその薬を譲ってくれんか」

王様は頼みますが、若者は首を横に振ります。

「ならば金貨の小山をやろう。あるいは宝石を散りばめた首飾りはどうだ」

しかしそれにも若者はすげなく首を振りました。なかなか手に入れないとなると、王様はますますその薬が欲しくて欲しくて仕方なくなってしまうました。

そのやりとりをびくびくしながら見ておりましたのは世界で一番醜い娘です。

なにしろ若者は天から授かった神秘の薬などと大層なことを吹かしておりますが、その正体は悪魔が押し付けていった怪しげな薬なのです。もしも王様に何かあったとしたら、自分たちはただではすみません。良くて水責め、悪くて打ち首拷問でしょうか。

「よし、ならばこうしよう。おぬしの欲しいものは何だってくれてやろうではないか」

だからその代わりに薬をくれ、ととうとう王様は破格の申し出をいたしました。けれどその言葉にすら若者は首を縦に振りませんでした。

「いえいえ、私は何一つ欲しくありません。私はこの両の手の中に入るものだけで充分満足なのです」

「では余にはその薬はくれないということだな」

王様はこの世の終わりかというぐらいにがつくりと肩を落としたが、若者はそれを救いに現れた天使のような顔でにっこりと首を振りました。

「とんでもございません、陛下。私はすでにこの薬の恩恵に預かり、非常に満足しております。ですから残りの一滴を、私はぜひとも偉大な国王陛下に飲んでいただきたく思っております――」

それを聞いた途端、すっかり嬉しくなった王様は飛び上がって若者から薬瓶を奪い取りました。

そしてまわりの臣下が止めるのも聞かず一息に薬をあおってしまったのです。なんて警戒心のない王様なのでしょう！

王様は薬を飲み下した瞬間目を見開き、「うっ！」と声をあげ目を見開きました。娘はぎよつと顔を引きつらせます。

（こ、これは打ち首拷問決定かつ）

――びる娘を尻目に、しかし王様はふらふらとした足取りで後退りし、すくと玉座に腰を落としました。

そしておろおろと臣下が心配する中、ふつと大きなため息をついたのです。

第5話

「まるで目の前の霧が晴れたような思いだな」

王様はひどく申し訳なさそうな面持ちで、顔を上げます。

その目からはこれまでの狂気めいた色は消え、穏やかで理知的な光が宿っていました。王様は娘と若者に向かって言います。

「双方とも酷い事を申してすまなんだ。もう無理強いはいしないゆえ、許しておくれ」

そうです。確かに悪魔から貰った魔法の薬は効果を発揮したのです。

数日前、悪魔から貰った薬を前に、若者はひとつの計画を打ち立てました。

それは、諸悪の根源である王様に魔法の薬を飲ませることで王様の欠点である悪趣味を治し、ついでに自分たちの自由も取り戻そうと言う一石二鳥の計画です。

この思い付きを成功させるのに重要なのは、いかに自然にこの薬のことを王様の耳に入れるかということ。それには王様のもうひとつの欠点である、嗜好きを利用するのが一番でした。

ようするに魔法の薬の噂を広めた人物こそ、まさしくこの若者だったのです。

もつとも若者は塔から自由に出入りすることはできなかったのですが、計画に従って街に噂を広めたのは必然的に世界で一番醜い娘になりました。若者の指示はとてもの確で、お陰で噂はあつという間に街から街へと伝わり国中に広まりました。そしてそれは確かに間違いなく王様の耳まで届いたのです。

「と言うことは、わたしたちはもう自由にして良いということですね」

娘は念を入れて、用心深く王様に尋ねます。

「そのとおりだ」

王様ははつきりとうなずきました。すっかりまともになった王様はもう無理に若者と娘の子供を見たいとは言いだしません。

「偽って飲ませた薬のことで処罰はございませんか」

若者も重ねて尋ねます。なにしろ神秘の薬と嘘について王様に悪魔の薬を飲ましたのは確かです。

「余の目の曇りを払ってくれたことを感謝したいくらいだよ」

王様は苦笑するように答えました。悪趣味が治ったついでに、この王様、随分と懐深くなったようです。

「じゃあ報償金は？」

娘は勢いにのって思わずたずねます。

「……む。望むままにとらせよう」

王様は一瞬たじろぎ、うなずきました。

どさくさに紛れて娘は「報償金だけ貰ってばっくれてしまえ」という初志貫徹も、果たしたのでありました。

こうして世界一醜い娘と世界一美しい若者は、見事自由の身になったのです。

ようやく王様の我が儘に付き合わなくても良くなった娘は、同じように自由になった世界一美しい若者を見送るために国はずれまでやってきました。王様から貰った報償金がつぱりあるので馬でも馬車でも乗り放題なのですが、移動は飽くまで徒歩するのが若者のポリシーのようです。

醜い娘は若者に尋ねます。

「あなたはこれからどうするつもりですか？」

「そうですね。まだ少し旅をし足りないのあと二、三の国を回ろうかなと思っています」

「そうですか……」

娘はなんだかちよつと——いや、かなり猛然と寂しく思いましたが、しかし若者を引き止めるすべなどありません。ならばこんなに醜い自分ではあるけれど、せめて最後は笑顔で若者を送り出したい

と精一杯の笑みを浮かべました。

「それでは道中お気をつけて下さいね。またどこに悪趣味な王様が
いるとも限りませんので」

「そうですね」

若者は始めて会った時と少しも変わらぬ笑みをにこにここと浮かべています。

「もし気が向きましたら、またこの国にも遊びに来て下さいね。
あなたにはあまりいい思い出のある国ではなくなってしまったかも知れませんが」

立て続けに若者に話しかけながら、娘は「もう彼と会うことは無いのだな」とそう考え、堪らず零れ落ちそうになる涙を必死で堪えました。

そうするとただでさえ醜いその顔がまるで地獄から来た悪鬼のように歪みますが、それでも娘は必死で笑みを浮かべていました。しかし若者はにっこりと微笑んで娘に言います。

「大丈夫ですよ。この国は私にとってとても思い入れのある国になりましたから」

娘は首を傾げます。

「こんな鈴を鳴らしたような可愛らしい声で喋る、しかも私の顔を気にしないでくれる娘さんがいる国を嫌うなんてできる訳がありませんよ」

臆面もなく述べられたその言葉に世界一醜い娘は真っ赤になります。それを知ってか知らずか、若者はさらに笑って続けます。

「私の本業は楽士ですが、次にこの国に訪れる時までには素敵な物語をたくさん仕入れてきます。そしてまた楽しそうに笑い声を上げて、私の話を聞いてくれますか」

思いがけないその言葉に娘はもう心から嬉しくなっていました。にっこりとうなずく意外にできることなどありませんでした。

「じゃあわたしも、教えてもらった歌をもっとうまく歌えるようになっ
ておきます！」

その返事に、若者もことさら嬉しそうに笑みを深めました。

こうしてまたいつか必ず会う約束をして娘と若者は別れました。若者を見送る娘の顔はやはり世界一醜い顔でしたが、それでもそこに浮かんだ笑顔は世界で一番幸せそうに、きらきらと輝いておりました。

——という事で、お兄さん。この物語はこれでおしまいだ。

ああん、なんだって？ 気になることがまだたくさんあるって？ 分かった分かった。順番に答えていってやるよ。

そうだよ、あんたの考えている通りこのお話の王様はこの国の今の国王陛下さ。あんた勘が鋭いね。

え、聞いたことがあるって？ 三国一の賢王と名高いこの国の王様も、以前はかなり悪趣味で酷い王様だったって？ いや、酷いは少し言いすぎだろうよ。確かに悪趣味は悪趣味だったけど、そうじゃなければひとつ欠点を治したくらいでここまで立派な王様だとは言われないって。

じゃあこれはいったいいつのお話なのか？ そんなん自分で言っただけだからだろうが。この国の王様が若い頃のお話だよ。

ああ、まあ確かに今もまだそんなに年食ってるわけじゃないけど、考えてみるよ。ガキにとつちや自分が生まれる前の話なんて全部むかしむかしのおとぎ話さ。自分で言うなって？ ほっとけ。

で、最後はなんだ。世界で一番醜い娘と一番美しい若者はその後いったいどうなったんだって。始めに言っただろう？ お約束で終わるハッピーエンドの物語だって。そういうお話は大抵は「めでたしめでたし」で終わるもんなのさ。

つまり……そうだな、お兄さん。おいらの顔をどう思う？ ああ？ 取り立ててなんということも無い平凡極まりない顔だって？

言いたいこと言う兄さんだなあ。まあいいけど。つまり、世界で一番醜い娘と一番美しい若者の子供は極々平凡な顔をしておりました、ということなのさ！

——めでたしめでたし。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6457c/>

世界で一番醜い娘と世界で一番美しい若者

2011年8月16日03時25分発行